

た。各プライマーで1回目のPCR増幅をおこなった後、このPCR産物をテンプレートとして同じプライマーで2回目のPCR増幅をおこなう、2段階PCRをおこなった。

領域②ではCMN-A10、B20、B22の3つのプライマーを用い、領域①と同様の方法で2段階PCR増幅をおこなった。

領域③ではプライマーPSID-AとBのセットを用いて1回目のPCRを行い、2回目のプライマーはPSID-Aの内側、遺物用に設計されたPSID-A2とBのセットを用いてネストドPCRをおこなった。この領域は品種間の塩基配列の相違が顕著であり、イネでは温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカとの判別に用いられている。いずれもPCR法の温度条件、反応液の組成などは定法によった。増幅されたプロダクトを1.5%アガロースゲルの電気泳動によりDNA断片を確認後、ABI PRISM 337 Genetic Analyzer (Applied Biosystems, USA)により塩基配列の特定をおこなった。今回使用したプライマーの配列を表2に示す。

表2 PCR増幅に使用したプライマー

プライマー名	配列	TM値(°C)	判定
A-10	GCC TGC CTC ACG	42	Tr
A-32	CTT GTC ATG TGT	34	
B-20	GTC GCC TTA CCA	38	Tm
B-22	TCT GCT GAC CGG	40	Tr/Tm
PSID-A	AAA GAT CTA GAT TTC GTA AAC AAC ATA GAG GAA GAA	55	Tr/Tm
PSID-A2	CGT CGT GGT GGA AAA ATC TGG GTA CGT ATA TT	52	
PSID-B	ATC TGC TAC ATT TAA AAG GGT CTG AGG TTG AAT CAT		

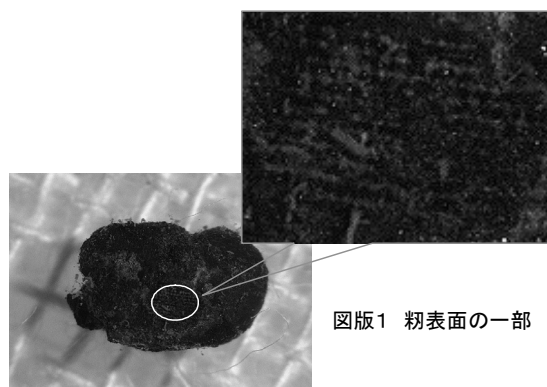
### 3. 結果と考察

顕微鏡観察の結果、炭化した種子の表面に図版1のとおり籾の形状を残すものがあつた。しかし、一部には熱を受けたと思われる小さな穴が確認され、DNAが増幅されなかった一因と推定された。

領域①のランダムプライマーCMN-A32で増幅したところ、図版2のとおりDNA断片が増幅された。レーン8はポジティブ・コントロールのジャポニカで、この断片と同じ矢印Aの位置に増幅されたサンプルがジャポニカ

型である。なお、レーン9のネガティブ・コントロールでは増幅がみられなかったため、コンタミネーションはなかったと判断した。このように、インディカ型とジャポニカ型を判定した結果、増幅された14サンプルのDNA断片はすべてジャポニカと確認された(表3)。表3のIはインディカ型、Jはジャポニカ型を示し、一はDNA断片が増幅されたものの、判定の長さのDNA断片が得られなかったことを示す。サンプルの顕微鏡観察からもインディカの特徴を示すものは見られなかった。

領域②で増幅された断片のうち12サンプルは温帯ジャポニカであつた(表3)。表中のTrは熱帯ジャポニカ型、Tmは温帯ジャポニカ型を示す。なお、表3の空欄はDNA断片が増幅されなかったサンプルで、残りの10点はいずれの増幅もみられなかった。



図版1 籾表面の一部

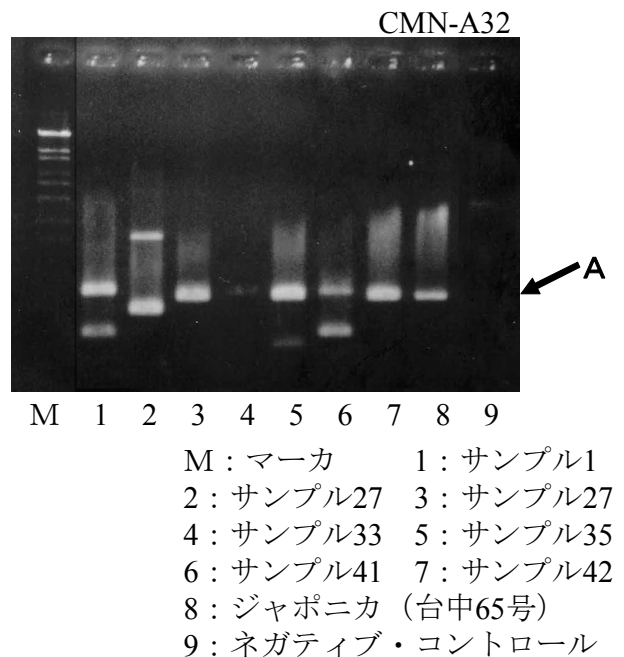
表3 DNAの増幅結果

サンプルNo.	遺構名	層位	遺物番号	サンプル番号	I/J	Tr/Tm
1	SD320	埋土3層	98-659-01	A1-0	J	Tm
2	SD320	埋土3層	98-659-02	A1-1	—	
3	SD320	埋土3層	98-659-03	A1-2		—
4	SD320	埋土3層	98-659-04	A1-3		—
5	SD320	埋土3層	98-659-05	A1-4		
6	SD320	埋土3層	98-659-06	A1-5	—	
7	SD320	埋土3層	98-659-07	A1-6	J	Tm
8	SD320	埋土3層	98-659-08	A1-7	J	Tm
9	SD320	埋土3層	98-659-09	A1-8		—
10	SD320	埋土3層	98-659-10	A1-9		
11	SD320	埋土3層	98-659-11	A1-10		
12	SD320	埋土3層	98-659-12	A1-11		
13	SD320	埋土3層	98-659-13	A1-12		
14	SD320	埋土3層	98-659-14	A1-13		—
15	SD320	埋土3層	98-659-15	A1-14		—
16	SD320	埋土3層	98-659-16	A1-15		—
17	SD320	埋土3層	98-659-17	A1-16		
18	SD320	埋土3層	98-659-18	A1-17		
19	SD320	埋土3層	98-659-19	A1-18		—
20	SD320	埋土3層	98-659-20	A1-19		
21	SD320	埋土3層	98-659-21	A1-20		
22	SD320	埋土3層	98-659-22	A1-21	J	Tm
23	SD320	埋土3層	98-659-23	A1-22	J	Tm
24	SD320	埋土3層	98-659-24	A1-23		
25	SD320	埋土3層	98-659-25	A1-24	J	Tm
26	SD320	埋土3層	98-659-26	A1-25		—
27	SD320	埋土3層	98-660-01	C1-0	—	—
28	SD320	埋土3層	98-660-02	C1-1	J	Tm
29	SD320	埋土3層	98-660-03	C1-2	—	Tm
30	SD320	埋土3層	98-660-04	C1-3	J	Tm
31	SD320	埋土3層	98-660-05	C1-4	J	Tm
32	SD320	埋土3層	98-660-06	C1-5	J	Tm
33	SD320	埋土3層	98-661-01	D1-0	J	—
34	SD320	埋土3層	98-661-02	D1-1	—	—
35	SD320	埋土3層	98-662-01	G1	J	—
36	SE309	埋土2層上部	98-663-01	2		—
37	SE309	埋土2層上部	98-663-02	No.2		—
38	SE309	埋土2層中部	98-664-01	No.3-1		—
39	SE309	埋土2層中部	98-664-02	No.3-2	—	—
40	SE309	埋土2層中部	98-664-03	No.3-3	—	—
41	SE309	埋土2層中部	98-664-04	3	J	—
42	SE309	埋土2層中部	98-665-01	4	J	Tm
43	SE309	埋土2層中部	98-665-02	No.4		—

葉緑体 DNA の領域③を増幅し、かつ塩基配列の特定できたサンプルは温帯ジャポニカの配列を示した。

上記の結果から、本出土遺物がジャポニカ型を示すイネであり、さらに温帯ジャポニカであることが判明した。しかし、温帯ジャポニカと判定できたサンプルは43点中12点のみであったため、熱帯ジャポニカあるいは雑種が存在した可能性も否定できない。弥生時代の遺跡の多くは熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカや雑種が混在していたが、中世の炭化米のデータは極めて少ない。今回、東北地方で出土した炭化米の結果が得られたことは中世の東北地方の稲作を知るうえで大変貴重である。これまでのデータより中世において西日本では温帯ジャポニカが大半を占めており、本結果から東北地方でも同様の傾向が示された意義は大きい。

今回のサンプルは、いずれも完全に乾燥していたため DNA の抽出効率が低かった可能性がある。今後はさらに保存状態の良い熱を受けていないサンプルが DNA 分析できれば、東北地方の稲作の変遷を考えるうえで貴重なデータが得られると考えられる。



図版2 DNAを断片化した泳動写真

#### 文献

- 青木千佳・西村隆雄・安井修二ほか 1999 「マルチビーズショッカーによるイネ生葉からの DNA および RNA 抽出法の改良」『育種学研究 第1巻』別冊2号 18頁
- 中村郁郎 1995 「DNAフィンガープリント法」『植物遺伝育種学実験法』朝倉書店 113-117頁
- 佐藤洋一郎 1999 『DNA考古学』東洋書店 201頁
- 花森功仁子・大角信介・望月峰子・向井譲・佐藤洋一郎 2007 『全国の遺跡から出土したイネ種子の遺伝的傾向』日本文化財科学会第24回大会 162-163頁
- Nakamura, I. 1990 New DNA Fingerprinting Procedure. Amplified Fragment Length Polymorphism of Hazy Association (ALPHA). Annu. Rep. Natl. Inst. Genet.1 pp.105-106.
- Nakamura, I. and Y.I.Sato 1991 Amplification of DNA fragments Isolated from a Single Seed of Ancient Rice (AD800) by Polymerase Chain Reaction. Chinese J.Rice Sci. 5 pp.175-179.
- Nakamura, I., N.kameya, Y.Kato, S.Yamanaka, H.Jomori and Y.I.Sato(1997) A proposal for identifying the short ID sequence which addresses the plastid subtype of higher plants. Breed.Sci. 4 pp.385-388.

## 第5節 中野高柳遺跡第3次調査

### SD320溝跡、SE309井戸跡出土種実同定について

古環境研究所 金原美奈子

#### 1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

分析対象の遺構は、SD320溝跡、SE309井戸跡である。SD320溝跡は、調査成果から中野高柳⑥期(16世紀後半～17世紀前半)に属する遺構である。埋土から陶器、砥石、炭化米などが出土している。SE309は調査成果から中野高柳③～⑥期(12世紀～17世紀前半)に属する遺構である。埋土から刀子が1点、炭化米など出土している。

#### 2. 試料

試料は、中世SD320溝跡(B区 S-20Grid)の埋土3層から水洗選別された種実類91個体、同堆積土壌1点および中世のSE309井戸跡(C区 E-60Grid)で採取された堆積土壌3点である(表1)。

表1 サンプル一覧

試料番号	遺構名	層位	Grid	備考
試料 No.1	SD320	埋土3層	B区 S-20Grid	選別済試料91個体
試料 No.2	SE309	埋土2層上部	B区 S-60Grid	堆積物
試料 No.3	SE309	埋土2層中部	C区 E-60Grid	堆積物
試料 No.4	SE309	埋土2層下部	C区 E-60Grid	堆積物
試料 No.5	SD320	埋土3層	C区 E-20Grid	堆積物

#### 3. 方法

埋土については、以下の物理処理を施して種実の抽出を行う。

- i) 試料200ccに水を加え放置し、泥化を行う。
- ii) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。
- iii) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

#### 4. 結果

同定された分類群と個数を表2に示した。以下に、主要な分類群の記載を行う。なお、いずれの種実も黒色を呈し炭化している。

- i) ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

- ii) イネ *Oryza sativa* L. 果実 イネ科

長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。いずれも短粒である。

iii) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実 イネ科

楕円形を呈し、腹部の端には胚、背面には縦に一本の溝がある。側面形で胚と胚乳との接する輪郭線が円形である。長さ4.5 mmほど。

iv) コムギ *Triticum aestivum* L. 果実 イネ科

楕円形を呈し、腹部の端には胚、背面には縦に一本の溝がある。側面形で胚と胚乳との接する輪郭線が山形である。長さ3.6 mmほど。長さが短くずんぐりしており、現在のコムギとは形状が異なる。

v) イネ科 Gramineae 穎・果実

胚があり、イネ科として一括した。小型で円形を呈するものはイヌビエ属やエノコログサ属であるが、長さ1.3 mmほどで小さいため、ヒエやアワの雑穀ではなく雑草とみなされた。

vi) ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。

vii) カヤツリグサ属 *Cyperus* 果実 カヤツリグサ科

狭倒卵形を呈し、断面は三角形である。

viii) スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

倒卵形を呈し、扁平である

ix) ササゲ属 *Vigna* 種子 マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。長さ3.3 mm程度で小型である。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれる。

x) マメ科(ダイズ?) Leguminosae 種子 マメ科

黒色で楕円形を呈し、縦に一本の溝状の筋が走る。長さ6.0 mmほどでササゲ属とは大きさが明らかに異なる。タイズの可能性もある。

x i) シソ属 *Perilla* 果実 シソ科

球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。

## 5. 考察

中野高柳遺跡中世遺構からは栽培植物がやや多く同定された。SD320ではイネ、オオムギ、コムギ、ササゲ属、マメ類(ダイズ?)、SE309ではイネ、オオムギ、ササゲ属が検出された。SD320では他にイネ科やカヤツリグサ科の雑草類も多かった。栽培植物が多いことといずれも炭化していることから、周囲に生育あるいは栽培されていたものが堆積したのではなく、人為的に火を受けたものが投棄されるか落ち込んだものと考えられる。奈良県箸尾遺跡からイネ、オオムギ、コムギ、マメ類、ウリ類、ソバ、ナスなどが井戸から検出されており類似する。また、中世の畑作物の種実同定を行った類例は少ないが、中野高柳遺跡で示されるように、コムギやササゲ属ないしマメ類が現在のものとは大きさが異なり小型である。これらについては、今後の資料の増加によって、分布と消長を検討し、系統を検討する必要がある。

## 文献

- 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』 養賢堂 494 頁  
笠原安夫 1988 「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究 第2巻 生業』 雄山閣出版 131-139 頁  
金原正明・金原正子 1985 「箸尾遺跡第11次調査出土種実」『箸尾遺跡第10・11次 調査概報 奈良県遺跡調査概報 1991年度』 橿原考古学研究所 43-50 頁  
南木睦彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究 第4巻 生産と流通 I』 雄山閣出版 165-174 頁  
南木睦彦 1993 「葉・果実・種子」『第四紀試料分析法』 日本第四紀学会編 東京大学出版会 276-283 頁

# 第8章 ー総括ー

## 本文目次

第1節 出土遺物	403	1. 中野高柳Ⅰ期	404
1. 陶磁器	403	2. 中野高柳Ⅱ期	415
(1) 中野高柳Ⅳ期	403	3. 中野高柳Ⅲ期	415
(2) 中野高柳Ⅴ期	403	4. 中野高柳Ⅳ期	415
(3) 中野高柳Ⅵ期	403	5. 中野高柳Ⅴ期	415
(4) 中野高柳Ⅶ期	403	6. 中野高柳Ⅵ期	416
(5) まとめ	404	7. 中野高柳Ⅶ期	416
2. 木製品：杵	404	第3節 まとめ	416
第2節 遺構群の変遷	404		

## 挿図目次

第1図 中野高柳Ⅳ～Ⅶ期(13世紀～19世紀)の陶磁器・土器	405	第7図 中野高柳Ⅱ期遺構群全体図	409
第2図 中野高柳遺跡出土陶磁器、土器 時期別産地・種類別百分率表	406	第8図 中野高柳Ⅲ期遺構群全体図	410
第3図 中野高柳遺跡出土陶磁器 時期別・器種別百分率表	406	第9図 中野高柳Ⅳ期遺構群全体図	411
第4図 中野高柳遺跡出土陶器 時期別・器種別百分率表	406	第10図 中野高柳Ⅴ期遺構群全体図	412
第5図 中野高柳遺跡出土磁器 時期別・器種別百分率表	406	第11図 中野高柳Ⅵ期遺構群全体図	413
第6図 中野高柳Ⅰ期遺構群全体図	408	第12図 中野高柳Ⅶ期遺構群全体図	414

## 挿表目次

第1表 中野高柳遺跡出土陶磁器、土器時期別・産地別数量表	407	第5表 中野高柳Ⅶ期陶磁器種別・器種別数量表	407
第2表 中野高柳Ⅳ期陶磁器種別・器種別数量表	407	第6表 中野高柳Ⅳ～Ⅶ期陶磁器、時期別・産地別・器種別数量表	407
第3表 中野高柳Ⅴ期陶磁器種別・器種別数量表	407		
第4表 中野高柳Ⅵ期陶磁器種別・器種別数量表	407		

## 第8章 総括

### 第1節 出土遺物

#### 1. 陶磁器

中野高柳遺跡の第1～5次調査では、陶磁器は538点(陶器:433点、磁器:105点)出土しており、このうち、135点の陶磁器を図示した。これらは、Ⅳ期からⅦ期までの時期幅があり、ここでは、各期の組成の変遷をみておきたい。

##### (1)中野高柳Ⅳ期:13世紀～14世紀(第1図、第1～2・6表)

陶器62点、磁器9点の計71点が出土している。産地は、瀬戸美濃、常滑、山茶碗系窯、景德鎮窯、竜泉窯の5窯である。各窯の出土点数は、瀬戸美濃産陶器5点、常滑産陶器48点、山茶碗系窯陶器9点、景德鎮窯磁器2点、竜泉窯磁器7点である。産地別の組成では、常滑産陶器の出土が多く、約68%を占め、次いで、中国産磁器が17%を占めている。SK128からは、小皿:景德鎮窯、中碗:竜泉窯が1点ずつ出土している。器種は、皿、碗、甕、片口鉢、瓶子、梅瓶の6器種が認められ、甕が68%を占める。このうち、皿には、磁器の小皿が2点あり、産地は景德鎮窯、竜泉窯である。甕には大甕、中甕がある。大甕は44点、中甕1点で産地はすべて常滑である。常滑産の大甕はほとんどが破片で、第1～5次調査の各調査区から出土している。

##### (2)中野高柳Ⅴ期:15世紀～16世紀後半(第1図、第1・3・6表)

陶器20点が出土している。磁器は出土していない。産地は、瀬戸美濃、常滑、中国産である。各窯の出土点数は、瀬戸美濃産陶器10点、常滑9点、中国1点である。瀬戸美濃産と常滑産で95%を占める。器種は、皿、碗、片口鉢の3器種が認められる。皿は、丸皿、小皿、緑釉皿の5点があり、産地は瀬戸美濃である。碗は、大碗、中碗の6点がある。大碗は、瀬戸美濃2点、中国1点である。中碗も瀬戸美濃2点、中国1点である。片口鉢9点は常滑である。

##### (3)中野高柳Ⅵ期:16世紀後半～17世紀前半(第1図、第1・4・6表)

陶器4点が出土している。磁器は出土していない。産地は瀬戸美濃だけである。器種は、小皿3点と大碗1点が認められる。このうち、小皿1点と大碗1点は第3次調査SK311の土墳墓から出土している陶器である。大碗は天目形である。

##### (4)中野高柳Ⅶ期:17世紀後半～19世紀(第1図、第1・5～6表)

陶器17点、磁器23点の計40点が出土している。産地は、肥前、肥前(唐津)、肥前(波佐見)、丹波、京都、瀬戸美濃、常滑、小野相馬、大堀相馬、岸窯系、堤の10窯である。各窯の出土点数は、肥前(磁器9点)、肥前(唐津)1点、肥前(波佐見)磁器6点、丹波2点、京都1点、瀬戸美濃11点(陶器3点、磁器8点)、常滑1点、小野相馬1点、大堀相馬4点、岸窯系3点、堤1点である。肥前産、肥前(波佐見)産、肥前(唐津)産で40%を占める。器種は、皿、碗、鉢、瓶・甕、播鉢、香炉、段重、土鍋、乗燭、蓋物、蓋物・蓋の12器種が認められ、皿と碗で65%を占める。皿は五寸皿、小皿が認められる。五寸皿は磁器4点で、肥前3点、肥前(波佐見)1点である。小皿は8点で、陶器3点(瀬戸美濃2点、小野相馬1点)、磁器5点(肥前(波佐見)1点、瀬戸美濃4点)である。碗は中碗、小碗が認められる。中碗は12点で、磁器(肥前4点、肥前(波佐見)3点、瀬戸美濃3点)、陶器2点(京都1点、瀬戸美濃1点)である。小碗は2点で、陶器1点(大堀相馬)、磁器1点(瀬戸美濃)である。鉢は、大鉢が2点認められる。いずれも陶器で、産地は肥前(唐津)と常滑である。このほか、肥前では小瓶、段重が各1点、丹波では播鉢2点、瀬戸美濃では蓋物・蓋1点がある。大堀相馬では乗燭、蓋物、豆甕、岸窯系では播鉢、香炉、堤では土鍋がそれぞれ1点ずつ出土している。

##### (5)まとめ

各時期の器種組成をみると、陶器では、Ⅳ期に甕が75%、片口鉢が14%、Ⅴ期に片口鉢が45%を占める。碗はⅣ期からⅦ期まで認められる。また、Ⅳ期からⅥ期には、わずかではあるが、梅瓶や茶道具の大碗など高級品が含まれることから、有力層の存在が考えられる。

産地別の組成では、Ⅳ期からⅦ期にかけて、瀬戸美濃の流通が認められる。磁器はⅣ期とⅦ期に認められる。Ⅳ期はすべて中国産で、皿、碗、梅瓶の3器種がある。Ⅴ期からⅦ期は、すべて国内産で、皿、碗、段重、瓶、蓋物・蓋の5器種がある。また、Ⅶ期には、産地が10窯に増加し、器種も増えており、播鉢、土鍋などの日常雑器が含まれている。これは、新たに操業された窯の増加に比例している。

仙台平野中北部の中世の遺跡との比較では、中野高柳遺跡のある七北田川下流域では今市遺跡、鴻ノ巣遺跡、東光寺遺跡、洞ノ口遺跡、若宮前遺跡など、名取川下流域では王ノ壇遺跡、戸ノ内遺跡、富沢遺跡、中田南遺跡、南小泉遺跡、今泉遺跡などが知られており、これらの遺跡で、常滑産陶器と地元産陶器の比率をみると、七北田川下流域の鴻ノ巣遺跡では半数を常滑産が占めており、中野高柳遺跡と類似するが、名取川下流域では地元産陶器が多い傾向がある。

## 2. 木製品：枡

第1次調査のSK128土坑からⅣ期(13～14世紀)の枡:No.01084が出土している。底板、側板の樹種はスギである。平面形は長方形で、外寸:長さ20.6cm、幅19.5cm、高さ9.6cm、内寸:長さ18.4cm、幅17.4cm、高さ8.4cmで、容量約3856cm<sup>3</sup>である。京枡換算値は約2.1升である。東北地方での中世の枡の出土は、仙台市王ノ壇遺跡の枡が知られている(仙台市教育委員会2000)。この枡は方23.3cm、深12.3cmで、3.7升である。組み合わせは、凹凸2箇所の切り込みが対称の位置にあり、本遺跡出土の枡とは組み合わせかたが違う。側面一枚の外面には組板として使用された痕跡が認められる。また、福島県郡山市猫田遺跡から枡が出土しており、この枡は約2.7升である(福森1999)。

SK128土坑出土の枡は補修の跡は見られないが、端や角の部分が擦れて丸くなっている。このことから、長期的な使用が考えられる。また、王ノ壇遺跡出土の枡と同様に側板や底板には組板として使用された痕跡が認められる。

## 第2節 遺構群の変遷

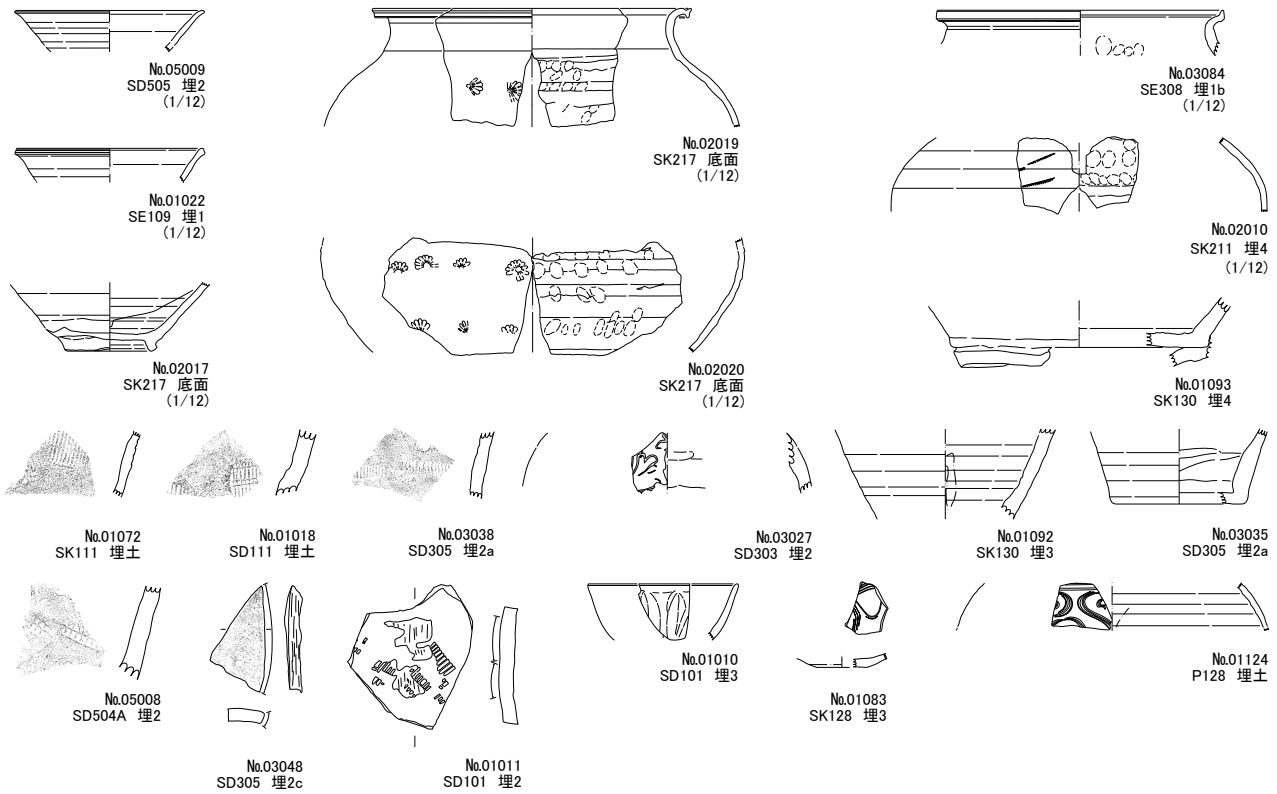
第1～5次調査で検出された遺構群の変遷を、宮城県教育委員会(2003～2006)の成果をもとに、整理しておきたい。なお、宮城県教育委員会では報告している遺構名称には、頭に「県教委」の文字を付した。

### 1. 中野高柳Ⅰ期:10世紀前葉(第6図)

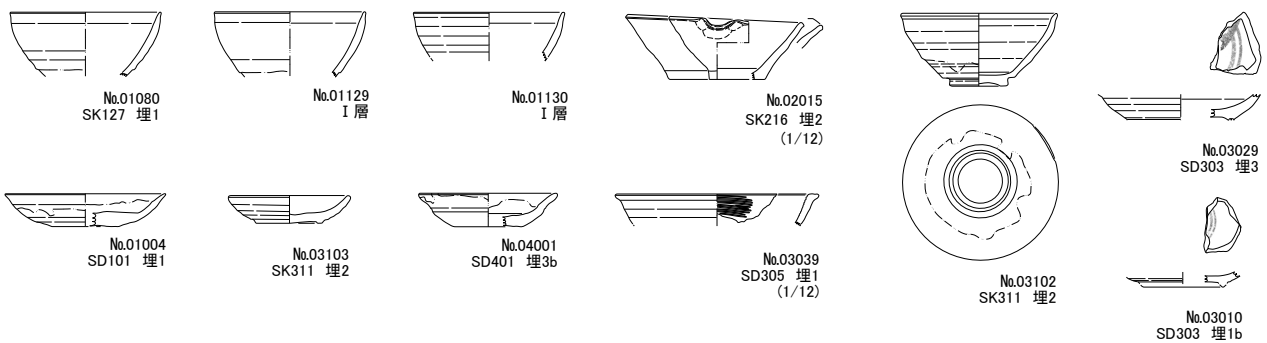
基本層Ⅵ層上面で検出された遺構群である。遺跡の北部から中央部にかけて、SR301とSR101の西側でⅥ層畑跡が第1次調査と第3次調査で検出されている。SR301、SR101は県教委SD1100河川跡に対応する。

第1次調査のⅥ層畑跡は、西側をSD110、SD113の南北に走る2条の溝で区画されている。このⅥ層畑跡は県教委SF1334に対応する。第3次調査では、北側の東西方向にSD356、西側の南北方向にSD357があり、Ⅵ層畑跡を区画している。Ⅵ層畑跡は県教委SF1593に対応する。Ⅵ層畑跡は、宮城県教育委員会によって検出された畑跡(東西16～32m、南北約170m、面積約4100m<sup>2</sup>)の一部であり、この畑跡は、畝間に灰白色火山灰の1次堆積と2次堆積がみられ、火山灰の降下によって廃絶したと考えられている。また、Ⅰ期には、宮城県教育委員会の調査で、水田跡が検出されている。



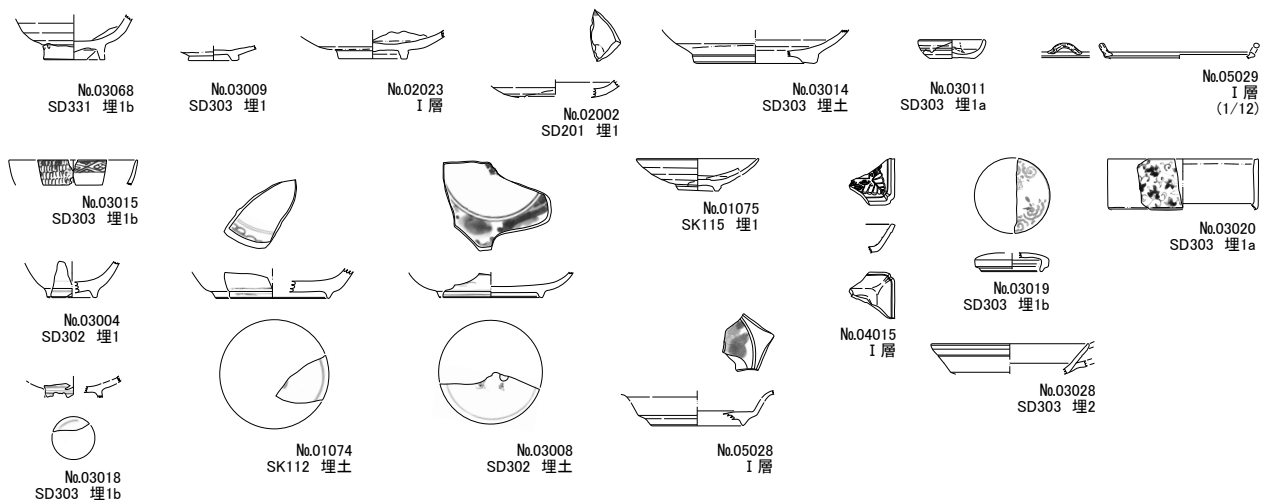


中野高柳Ⅳ期(13～14世紀)

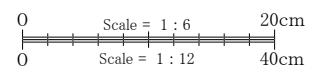


中野高柳Ⅴ期(15～16世紀後半)

中野高柳Ⅵ期(16世紀後半～17世紀前半)



中野高柳Ⅶ期(17世紀後半～19世紀)



第1図 中野高柳Ⅳ期～Ⅶ期(13世紀～19世紀)の陶磁器・土器

中野高柳遺跡 Ⅳ期 (71)	常滑										瀬戸美濃	山茶碗系窯	竜泉窯	景德鎮
中野高柳遺跡 Ⅴ期 (22)	常滑					瀬戸美濃					中国	在地		
中野高柳遺跡 Ⅵ期 (4)	瀬戸美濃													
中野高柳遺跡 Ⅶ期 (41)	常滑	瀬戸美濃・陶器	瀬戸美濃・磁器			唐津	丹波	京都	岸窯系	大堀相馬	小野相馬 堤	肥前	波佐見	在地

第2図 高柳遺跡出土陶磁器、土器 時期別産地・種類別百分率表

中野高柳遺跡 Ⅳ期 (71)	大甕					片口鉢		瓶子		大碗		砥石 大甕 用	中碗	小皿	中碗	梅瓶				
中野高柳遺跡 Ⅴ期 (20)	片口鉢				大碗		中碗		小皿		緑釉皿			丸皿						
中野高柳遺跡 Ⅵ期 (4)	小皿								大碗											
中野高柳遺跡 Ⅶ期 (40)	中碗		小皿			搦鉢		五寸皿		大鉢		小碗	香炉	土鍋	乗燭	蓋物	豆 甕	小瓶	段重	蓋物・ 蓋

第3図 高柳遺跡出土陶磁器 時期別・器種別百分率表

中野高柳遺跡 Ⅳ期 (62)	大甕					片口鉢		瓶子		大甕砥石用		中甕		
中野高柳遺跡 Ⅴ期 (20)	片口鉢			大碗		中碗		小皿		緑釉皿		丸皿		
中野高柳遺跡 Ⅵ期 (4)	小皿							大碗						
中野高柳遺跡 Ⅶ期 (17)	搦鉢		小皿		中碗		大鉢		小碗	豆壺	香炉	土鍋	乗燭	蓋物

第4図 高柳遺跡出土陶器 時期別・器種別百分率表

中野高柳遺跡 Ⅳ期 (9)							
	大碗	中碗	小皿	碗	梅瓶		
中野高柳遺跡 Ⅶ期 (23)							
	中碗	小皿	五寸皿	小碗	小瓶	段重	蓋物・蓋

第5図 高柳遺跡出土磁器 時期別・器種別百分率表

※( ) 内は基数を示す

第1表 中野高柳遺跡出土陶磁器・土器時期別・産地別数量表

時期	産地 種別	常滑	瀬戸 美濃	山茶碗 系窯	肥前 唐津	丹波	京都	大堀 相馬	小野 相馬	岸窯系	堤	中国	肥前	瀬戸 美濃	肥前 波佐見	景德 鎮窯	竜泉 窯	在地	小計
		陶器	陶器	陶器	陶器	陶器	陶器	陶器	陶器	陶器	陶器	陶器	磁器	磁器	磁器	磁器	磁器	土器	
中野高柳Ⅳ期		48	5	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7	0	71
中野高柳Ⅴ期		9	9	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	22
中野高柳Ⅵ期		0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
中野高柳Ⅶ期		1	3	0	1	2	1	4	1	3	1	0	9	8	6	0	0	1	41
小計		58	21	9	1	2	1	4	1	3	1	2	9	8	6	2	7	3	138

第2表 中野高柳Ⅳ期陶磁器種別・器種別数量表

種別	器種	大碗	中碗	小碗	碗	五寸皿	小皿	緑釉皿	丸皿	大鉢	片口鉢	播鉢	大甕	中甕	豆甕	小瓶	瓶子	梅瓶	香炉	土鍋	乗燭	蓋物	蓋物・蓋	段重	大甕転用砥石	小計
陶器		0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	44	1	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	2	62
磁器		3	2	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	9	
小計		3	2	0	1	0	2	0	0	0	10	0	44	1	0	0	5	1	0	0	0	0	0	0	2	71

第3表 中野高柳Ⅴ期陶磁器種別・器種別数量表

種別	器種	大碗	中碗	小碗	碗	五寸皿	小皿	緑釉皿	丸皿	大鉢	片口鉢	播鉢	大甕	中甕	豆甕	小瓶	瓶子	梅瓶	香炉	土鍋	乗燭	蓋物	蓋物・蓋	段重	大甕転用砥石	小計
陶器		3	3	0	0	0	2	2	1	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
磁器		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計		3	3	0	0	0	2	2	1	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20

第4表 中野高柳Ⅵ期陶磁器種別・器種別数量表

種別	器種	大碗	中碗	小碗	碗	五寸皿	小皿	緑釉皿	丸皿	大鉢	片口鉢	播鉢	大甕	中甕	豆甕	小瓶	瓶子	梅瓶	香炉	土鍋	乗燭	蓋物	蓋物・蓋	段重	大甕転用砥石	小計
陶器		1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
磁器		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計		1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4

第5表 中野高柳Ⅶ期陶磁器種別・器種別数量表

種別	器種	大碗	中碗	小碗	碗	五寸皿	小皿	緑釉皿	丸皿	大鉢	片口鉢	播鉢	大甕	中甕	豆甕	小瓶	瓶子	梅瓶	香炉	土鍋	乗燭	蓋物	蓋物・蓋	段重	大甕転用砥石	小計
陶器		0	2	1	0	0	3	0	0	2	0	4	0	0	1	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	17
磁器		0	10	1	0	4	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	23
小計		0	12	2	0	4	8	0	0	2	0	4	0	0	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	0	40

第6表 中野高柳Ⅳ～Ⅶ期陶磁器・時期別・産地別・器種別数量表

時期	産地	種別	大碗	中碗	小碗	碗	五寸皿	小皿	緑釉皿	丸皿	大鉢	片口鉢	播鉢	大甕	中甕	豆甕	小瓶	瓶子	梅瓶	香炉	土鍋	乗燭	蓋物	蓋物・蓋	段重	大甕転用砥石	小計
中野高柳Ⅳ期	常滑	陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	44	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	48
	瀬戸美濃	陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5	
	山茶碗系窯	陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	
	景德鎮窯	磁器	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	
	竜泉窯	磁器	3	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
中野高柳Ⅴ期	常滑	陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	
	瀬戸美濃	陶器	2	2	0	0	0	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	
	中国	陶器	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
中野高柳Ⅵ期	瀬戸美濃	陶器	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
中野高柳Ⅶ期	常滑	陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	瀬戸美濃	陶器	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
		磁器	0	3	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	8	
	肥前(唐津)	陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	丹波	陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
	京都	陶器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	大堀相馬	陶器	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	4	
	小野相馬	陶器	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	岸窯系	陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	
	堤	陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	
	肥前	磁器	0	4	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	9	
	肥前(波佐見)	磁器	0	3	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
	小計		7	17	2	1	4	15	2	1	2	19	4	44	1	1	1	5	1	1	1	1	1	1	2	135	

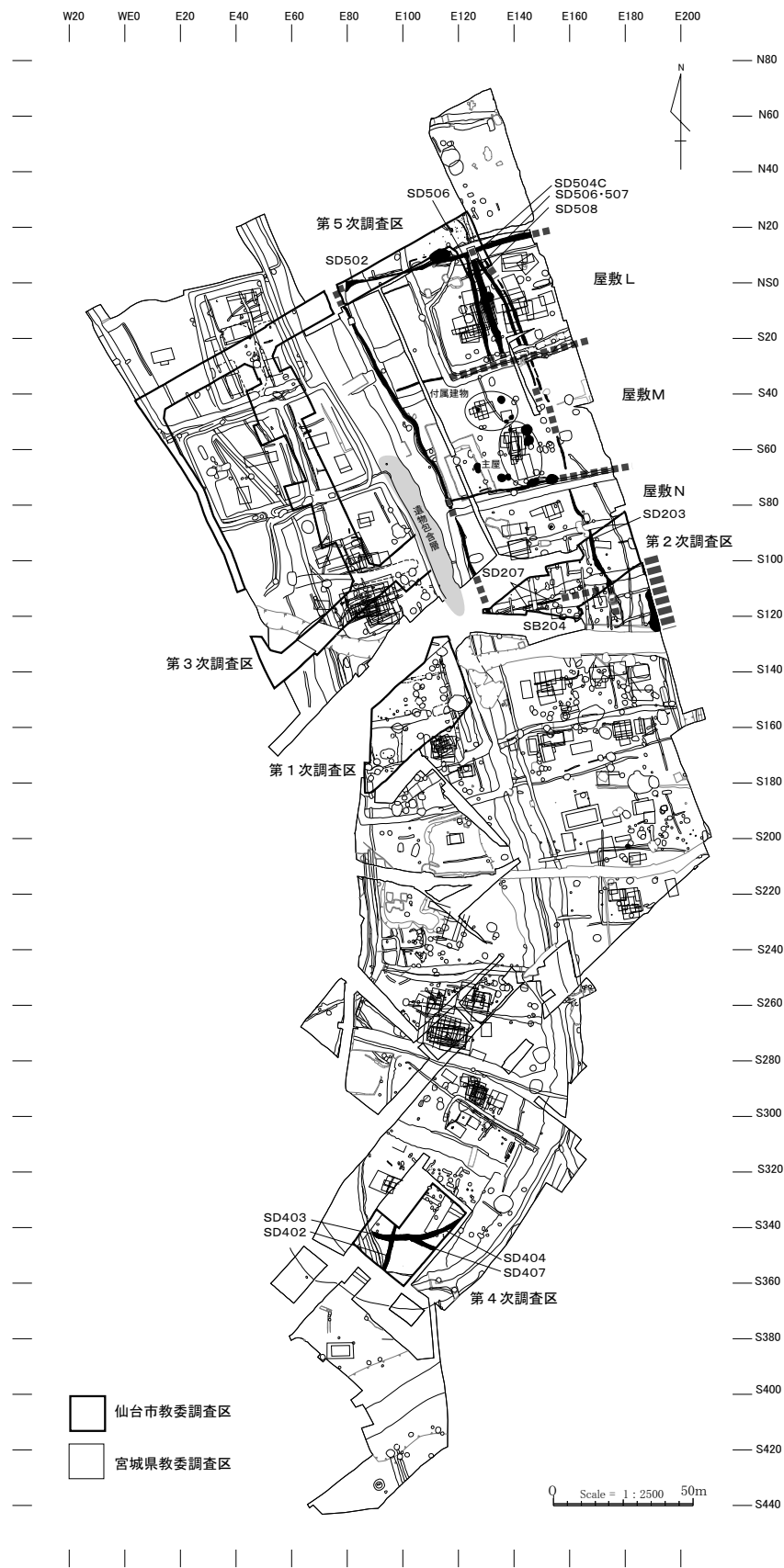


第6図 中野高柳 I 期遺構群全体図



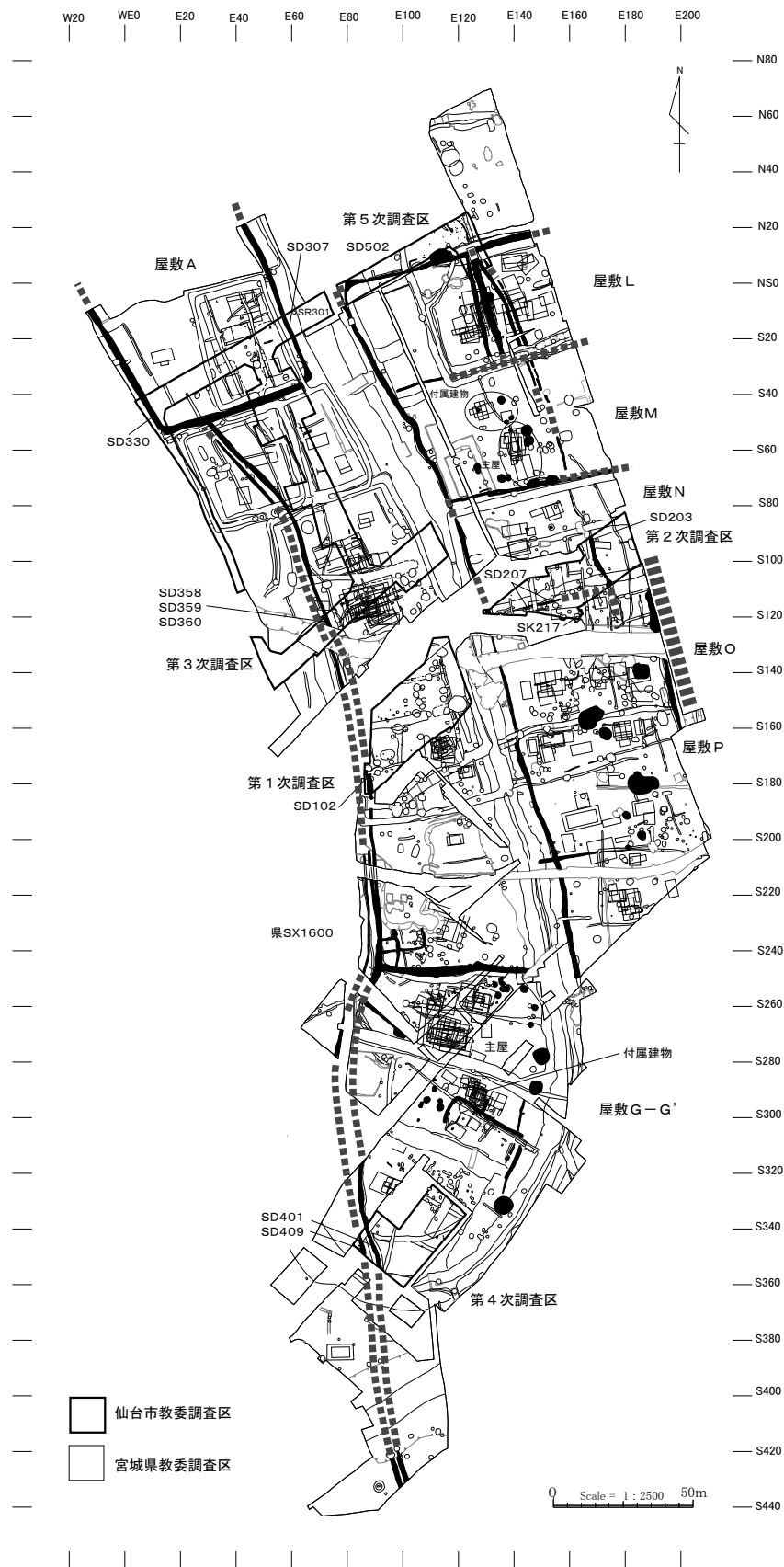
※グリッドは、宮城県教育委員会のものを使用した。

第7図 中野高柳Ⅱ期遺構群全体図



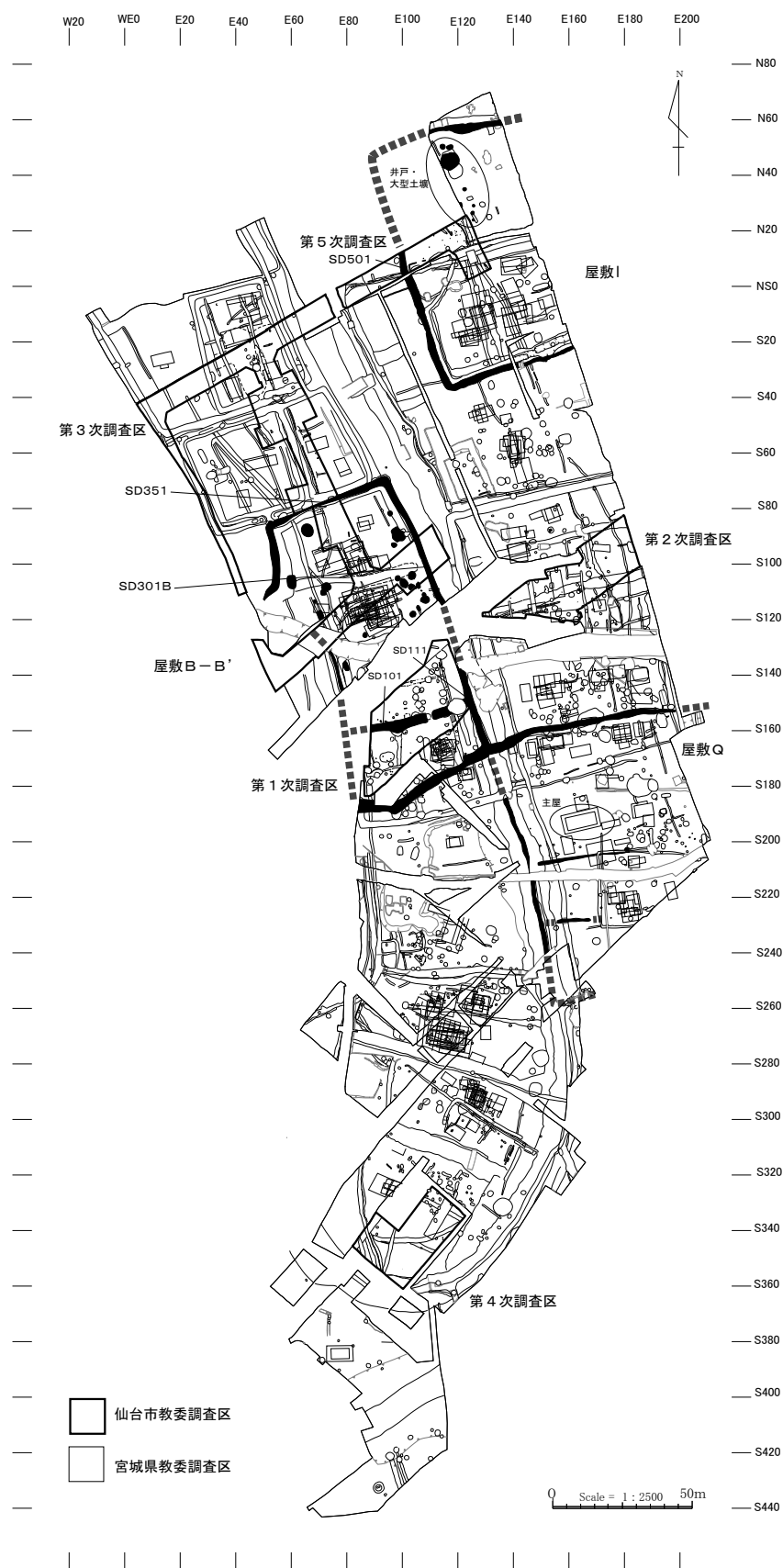
※グリッドは、宮城県教育委員会のものを使用した。

第8図 中野高柳Ⅲ期遺構群全体図



※グリッドは、宮城県教育委員会のものを使用した。

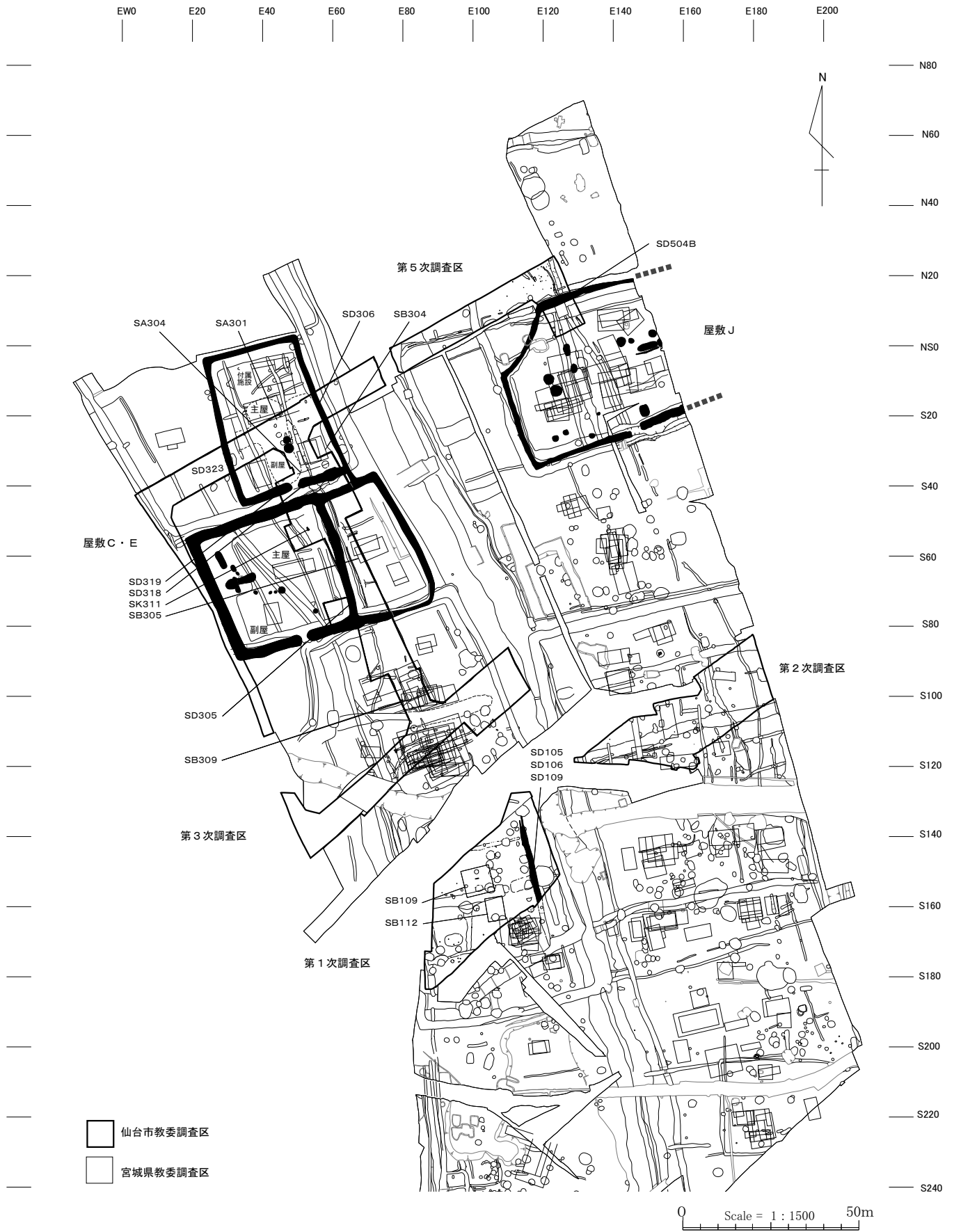
第9図 中野高柳Ⅳ期遺構群全体図



※グリッドは、宮城県教育委員会のものを使用した。

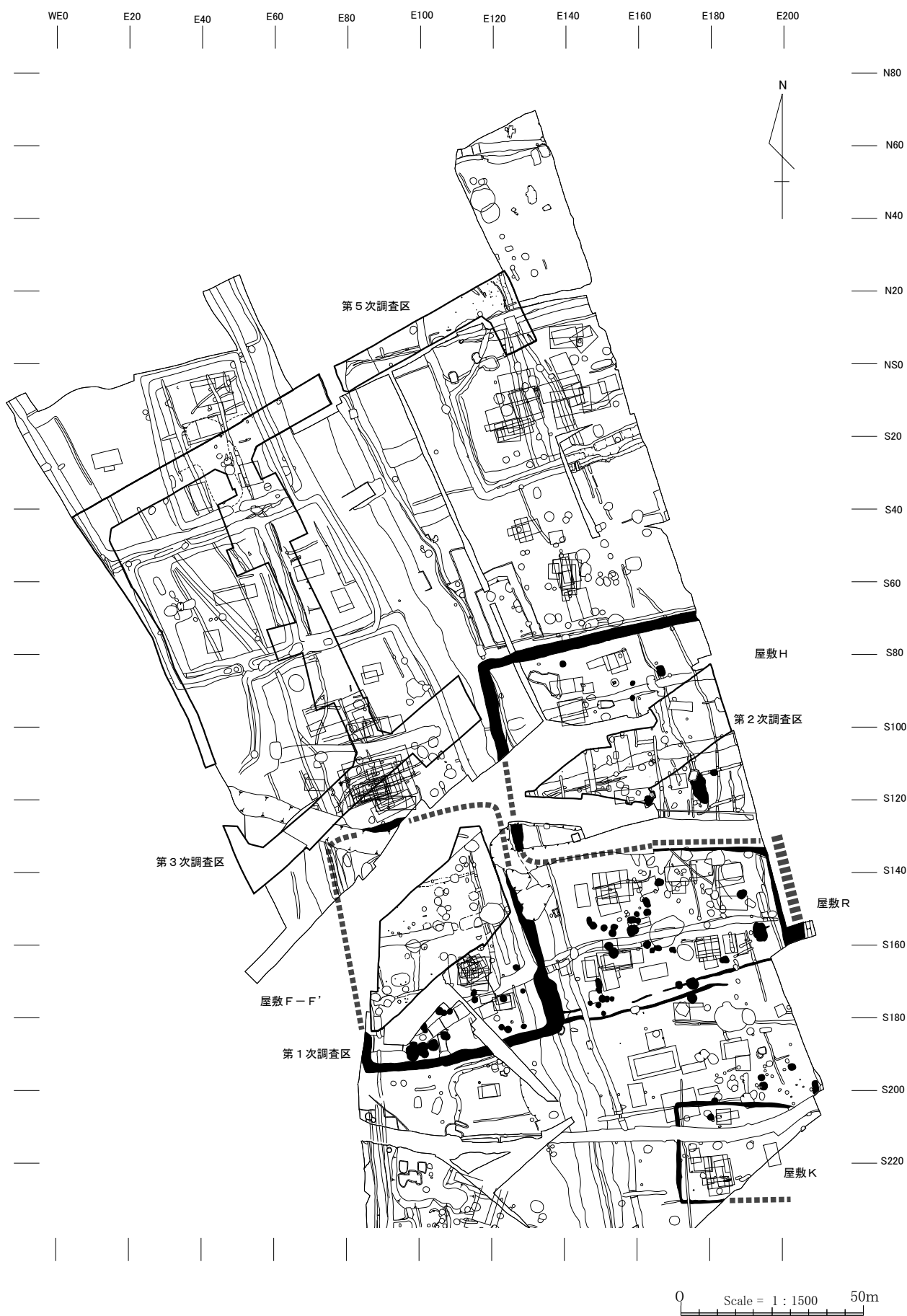
第10図 中野高柳V期遺構群全体図





※グリッドは、宮城県教育委員会のものを使用した。

第11図 中野高柳Ⅵ期遺構群全体図



第12図 中野高柳Ⅶ期遺構群全体図

## 2. 中野高柳Ⅱ期:10世紀中葉(第7図)

基本層Ⅴ層上面で検出された遺構群である。遺跡の北部から中央部にかけて、SR101の西側で小溝状遺構群が第1次調査で検出されており、Ⅰ期と同様、畑域が形成されている。SR101は県教委SD1100河川跡に対応する。

第1次調査の小溝状遺構群は、東側をSR101に区画されている。第3次調査の小溝状遺構群は、西側をSD355に区画されており、北側が県教委SF1303、南側が県教委SF1333に対応する。この小溝状遺構群は、宮城県教育委員会によって検出された畑跡(北側:東西53～55m、南北約122m、面積6600㎡以上、南側:東西約40m、南北55m以上、面積2200㎡以上)の一部である。なお、SD355は県教委SD1150に対応する。

## 3. 中野高柳Ⅲ期:12世紀(第8図)

遺跡北東部に屋敷が作られる時期で、Ⅰ期・Ⅱ期の河川跡は埋没し、中央部分が湿地化する。その東側に屋敷L、M、Nが検出されている。屋敷の規模は、それぞれ南北約40m、東西70mほどで、平面形は方形である。屋敷Lの北側を区画する溝にSD504C、屋敷L内部を区画する南北方向の溝にSD505～507、屋敷Nの内部を区画する南北方向の溝にSD203、東西方向の溝にSD207が、それぞれ対応する。また、第2次調査でSB204掘立柱建物跡が検出されている。第4次調査では、溝跡が4条検出されたが、屋敷を区画する溝か否かは不明である。

このⅢ期の屋敷の居住者は、県教委SX1200出土の土師質土器、鉄地銅象嵌轡などから、奥州藤原氏と関わりのある多賀国府の在庁官人クラスの有力者と考えられている。

## 4. 中野高柳Ⅳ期:13世紀～14世紀(第9図)

遺跡範囲内全体に遺構が認められる。Ⅲ期の屋敷L、M、Nに加えて、その南に屋敷O、P、北西に屋敷A、遺跡南端近くに屋敷G・G'が作られる。

屋敷L、M、Nでは、屋敷LにSD504C、SD506、屋敷NにSD206が、それぞれ、Ⅲ期と同様、対応する。屋敷A、G・G'、O、Pでは、屋敷Aの西側を区画する溝にSD330、東側を区画する溝にSD307が対応する。屋敷Oの北側を区画する溝にはSD203が対応する。屋敷の平面形は、ほとんどが方形である。屋敷Aの規模は、南北59m以上、東西55～61m、屋敷G・G'の規模は、南北約108m、東西60～75m、屋敷Oの規模は、南北43m、東西57m、屋敷Pの規模は、南北96m、東西54～57mである。それぞれの屋敷を区画している溝は、幅約1～3mである。また、この時期には、屋敷Aと屋敷G・G'を結ぶ道路跡:県教委SX1600が検出されており、その一部は、第1次SD102溝跡、第4次SD401溝跡として確認されている。

市教委の調査範囲ではないが、ほぼ構成が判明している屋敷G・G'について記載する。屋敷G・G'の北半部は主屋を中心として、前庭・副屋・北の付属施設といった建物や施設が配置され、区画の縁辺には井戸やゴミ穴とみられる大型土坑が分布している。このような主要施設の構成は、中野高柳Ⅴ期以降の屋敷にも継承されている。

## 5. 中野高柳Ⅴ期:15世紀～16世紀後半(第10図)

遺跡の北東部に屋敷I、西側中央部に屋敷B・B'、東側南部に屋敷Qが存在する。この時期の屋敷の区画溝の方向性はⅣ期と変わらないが、その踏襲はない。

屋敷B・B'では、東側を区画する溝にSD301Bが対応する。またその内部を区画する東西方向の溝にSD101が対応する。屋敷B・B'のほぼ中央には、第3次調査で検出された11棟の掘立柱建物跡があり、主屋と考えられる。屋敷B・B'の規模は、南北101～108m、東西約43m、屋敷Iの規模は、南北81～85m、東西45m以上、屋敷Qの規模は、南北96m、東西66m以上である。それぞれの屋敷を区画している溝は、幅約2～3mである。この時期の屋敷の平面形は、

方形から長方形へと変化している。

## 6. VI期: 中野高柳16世紀後半～17世紀前半(第11図)

主に、遺跡の北部で遺構が検出されている。屋敷Eは北西側、屋敷Jは北東側に位置する。V期までとは異なり、屋敷の規模が縮小している。

屋敷Eでは、区画Cの区画溝にSD323、SD306が対応し、区画D'と区画Eの境の区画溝にSD305が対応する。このSD305の西側、区画D'内の北東側から土壌墓SK311が検出されている。人骨(歯)が出土しており、副葬品には、六道銭、折敷に入れられた瀬戸美濃の天目茶碗・小皿、香敷、刀子がある。刀子の柄には海老が彫られており、天目茶碗には細かい傷が見られる。この細かい傷は茶笥の跡と考えられている。香敷の出土例としては、伊達政宗の墓(瑞鳳殿)から2.5cmほどの方形が、養種園遺跡からは雲母の薄片が出土しており、香敷の可能性が指摘されている。また、屋敷Jでは、北側の区画溝にSD504Bが対応する。この屋敷Jは、V期の屋敷Iの西側の一部と南の区画溝を踏襲している。屋敷Iからの規模の縮小が見られる。このほか、屋敷Eでは、その南側に、第1次調査で掘立柱建物跡2棟と区画する溝、第3次調査で掘立柱建物跡1棟が検出されており、他の屋敷が南側に存在していた可能性がある。

## 7. VII期: 中野高柳17世紀後半～19世紀(第12図)

遺跡の中央部に屋敷F・F'、H、R、南東部に屋敷Kが存在する。中央部の屋敷は、幅約3mの溝で区画され、南東部の屋敷Kは幅1mの溝で区画されている。第3次調査で、屋敷F・F'に続くと考えられる溝が検出されている。第3次、第4次調査では、水田土壌を確認している。

屋敷の平面形は方形で、規模は、F・F'が南北約59m、東西約48m、屋敷Hは、南北52～61m、東西65m以上、屋敷Rは、南北30～41m、東西約63m、屋敷Kは、南北約26m、東西39m以上である。屋敷F・F'は、出土した陶磁器の主体を日常雑器が占めていることから、有力農民層(豪農)の居住が考えられている。

## 第3節 まとめ

中野高柳遺跡では、I期:平安時代中頃からVII期:近世までほぼ継続して遺構が検出されている。土地利用の変遷としては、I・II期は生産域:畑域・水田域、III～VII期は居住域であり、III期:12世紀に画期がある。この時期には、多賀国府の在庁官人クラスの有力者の居住が考えられており、その後も、複数の屋敷から構成される居住域の継続性が確認された。宮城県教育委員会と仙台市教育委員会によって、遺跡の91%:約46000m<sup>2</sup>が調査されたことになるが、I・II期の居住域や、III～VII期の生産域は不明であり、この時期の集落構造あるいは居住形態を、周辺の遺跡などの調査を通して明らかにしていく必要がある。

### 文献

- 飯田 均 1995 「2. 東北」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 24～31 頁
- 小泉袈裟勝 1980 『枿』ものと日本の文化史 36 法政大学出版局
- 仙台市教育委員会 2000 『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書 249
- 田中則和 1995 「仙台市域の中世城館・集落跡」『古代から中世へ』中世都市研究2 中世都市研究会編 32～48 頁
- 田中則和 2005 「東北地方中世墓の様相と画期」『東北中世史の研究 下巻』高志書院 51～119 頁
- 福森久晃 1999 「荒井猫田遺跡Ⅱ区について」『シンポジウム 荒井猫田遺跡と中世の郡山 資料』
- 宮城県教育委員会 2003 『中野高柳遺跡Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第194集
- 宮城県教育委員会 2004 『中野高柳遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第197集
- 宮城県教育委員会 2005 『中野高柳遺跡Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第201集
- 宮城県教育委員会 2006 『中野高柳遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第204集

報告書抄録

ふりがな	なかのたかやなぎいせきだい1～5じちょうさ							
書名	中野高柳遺跡第1～5次調査							
副書名	宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書							
巻次	IV							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第361集							
編集者名	斎野裕彦 佐伯修一 多ヶ谷香理							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 電話 022-214-8894							
発行年月日	2010年3月12日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
なかのたかやなぎいせき 中野高柳遺跡 第1～5次	せんだいしみやぎのく 仙台市宮城野区	04100	01146	38° 16′ 11″	140° 58′ 55″	平成7年9月25日～平成12年5月11日	5,619.9㎡	土地区画 整理事業 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
第1次調査	畑跡 集落跡	平安時代 中世	掘立柱建物跡、溝跡、 井戸跡、小溝状遺構群		ロクロ土師器 陶磁器、杵		平安時代：畑跡 中世：集落跡	
第2次調査	集落跡	平安時代 中世	掘立柱建物跡、溝跡、 旧河道、井戸跡		陶磁器		中世：集落跡	
第3次調査	畑跡 集落跡 墓跡	平安時代 中世、近世	掘立柱建物跡、溝跡、 河川跡、井戸跡、小溝状 遺構群		ロクロ土師器 陶磁器、刀子		平安時代：畑跡 中世：墓跡2基 近世：区画溝	
第4次調査	集落跡	中世、近世	掘立柱建物跡、溝跡		陶磁器、釘		中世：区画溝 近世：区画溝	
第5次調査	集落跡	平安時代 中世、近世	溝跡、河川跡		陶磁器		中世：区画溝 近世：区画溝	

---

仙台市文化財調査報告書第361集

## 中野高柳遺跡第1～5次調査

－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ－

2010年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会  
〒980-8671 仙台市青葉区国分町三丁目7番1号  
文化財課 022(214)8894

印刷 遠 山 青 葉 印 刷 株 式 会 社  
〒980-0801 仙台市青葉区木町通二丁目5-24  
TEL 022(272)7371

---